

専攻医
の主張

専攻医3年目を振り返って

県立広島病院 循環器内科 濱本 晃太郎

4月になり外に出れば春風が心地よい季節になった。初期研修医の時期も含めれば、医者になってから6年目の春であり、自分が循環器内科に入局してはや3年がたつ。循環器内科はカテーテルを用いた検査・治療、ペースメーカー植え込みなど、内科系診療科としては観血的な手技が比較的多く存在する診療科である。また、急性心筋梗塞をはじめ緊急性の高い疾患に関わる分野でもある。うまく表現するのは難しいが、そうした循環器内科のdynamicsさに引かれ、自分は循環器内科という道を選んだ。循環器内科医になってから3年が経過したが、独り立ちへの道のりはまだ険しく遠い。『石の上にも三年』ということわざがあるが、なかなか『医師の上にも三年』とはいかないものであり、日々研さんにいそしんでいる。

さて、昨年度は激動の1年間であった。特に新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の世界的な拡大は、日本社会を大きく揺るがし、医療においても相当なインパクトを与えた。自分の勤務する県立広島病院は、広島県内で数多くのCOVID-19陽性患

者を受け入れ、当院の専攻医が積極的にコロナ診療に関わった。COVID-19の感染爆発はまさに災害医療であり、今までは通常に行えた診療が継続困難となり、当院の循環器内科のみならず数多くの診療科に大きな影響を与えた。しかし、このような窮状であっても、自分を含め当院の専攻医は丸となって協力し合い、難局を乗り越えることができたと自負している。

歴史を振り返ると、医者は過去に何度も感染症のpandemicと闘ってきたが、まさか令和の時代にこのような事が起こるとは誰しも想像できなかったであろう。時代の流れとともに情勢は変化していくものであり、われわれも逐一変化に応じて学習し適応する力が求められる。それは、COVID-19に関することだけでなく、日進月歩する循環器診療を含め医学全般において言えることでもある。自分は今年度の目標として、『変化』できる医師になることを掲げた。継続は力なりという言葉があるが、目標達成のためにも努力を続けていこうと思う。

コロナ禍でも必要な受診は確実に！ポスターについて

広島県健康福祉局医務課より、コロナ禍でも必要な受診は確実に！としたポスター（A4サイズ）・マグネットなどの提供がありました。

このポスターの裏面には、発熱等の症状のある方の相談・受診の流れや新型コロナウイルス感染症の陽性者の症例などについても記載されており、軽症でも、速やかに「かかりつけ医」か「積極ガードダイヤル」へご相談くださいとの内容になっております。

医療機関の受付等でご入り用の場合には、広島県医師会広報情報課（電話：082-568-1511、E-mail：kouhou@hiroshima.med.or.jp）まで必要部数をご連絡ください。なお、在庫がなくなりしだい、配布終了とさせていただきます。

